

新潟中央短期大学

暁星論叢

第57号 抜刷

(平成19年6月)

幼児の自立としつけについての親の意識

佐々木 宏 之

幼児の自立としつけについての親の意識

佐々木 宏 之

はじめに

他の多くの動物と違って、人間は自ら移動することができないほど未熟な状態で誕生する。生出後も親から自立した生活を営むまでに、20年に渡る長い歳月をかけるのである。それゆえ、親からの自立は、誕生から青年期に至るまでの人間の発達にとって、もっとも重要なテーマだといって差し支えないであろう。

自立と一言でいっても、発達段階の各々で迎える自立の内容は異なってくる。深谷(2000)は自立を身辺自立、経済的自立、精神的自立、社会的自立の4つに大別した。身辺自立は「基本的生活習慣の確立」を目標としたもっとも基本的な自立である。経済的自立では生活に必要な収入を得て自らの裁量で経済活動を行う。精神的自立は自我意識の発達、自己決定能力の獲得など、いわゆる「親離れ」を目標とする自立を意味する。そして社会的自立では、社会の成員として期待される役割をこなし、他者の生活にも貢献できる能力を身につけるのである。

本論で取り上げる幼児期の自立では、主に身辺自立と精神的自立を目指すことが課題となる(Havighurst, 1953)。以下では、幼児期の自立としつけに関する研究動向を概観し、著者が行なった意識調査について論考する。

幼児期の身辺自立

上述したように、身辺自立では食事、排泄、着脱衣、清潔などの基本的生活習慣の自立を目指すのだが(藤崎, 2005)、身辺自立についての実証研究はそのほとんどが障害児の自立に関するもので、健常児の身辺自立はこれまであまり研究対象とされてこなかった。その数少ない例がトイレトレーニングに焦点をあてた研究である。

近頃の保育現場では、子どものおむつ離れの遅れが問題となっている。その遅れの理由としては、布おむつが紙おむつに取って代わったこと、紙おむつの価格低下と品質改良、共働き世帯の増加、少子化などの原因が考えられる。おむつ離れの遅れは国内に限ったことではなく、米国ペンシルバニア大学のBlumら(2004)がアメリカでのおむつ離れの遅れを調べた結果、トイレトレーニングを始める時期が遅くなったこと、トイレでの排便を嫌がる子どもの増加、便秘する子どもの増加がその要因となっていることを見出した。彼

らはトイレトレーニングの開始時期が遅くなった理由に、その時期を判断できない親やトイレトレーニングに積極的ではない親が増えたことを挙げている。また、Hornら(2006)の調査によれば、おむつ離れは経済的にゆとりのある家庭ほど遅くなるという。紙おむつの価格が低下してきたとはいえ、経済的に困窮している家庭にとっては、家計を圧迫するおむつ購入の期間は短い方が望ましいということであろう。

社会経済の発展に伴う世代間の変遷は、トイレトレーニングに限らずその他の自立や親のしつけ方にも見受けられる。それとは逆に、民族・共同体の中で親世代から引き継がれる部分もあるだろう。こうした世代間の関係性は我々の調査でも着目した問題であり、のちに幼児期のしつけを概説する中で触れることにする。

幼児期の精神的自立

幼児期の精神的自立は、自主性・自律性の発達と分離不安の克服が目標となる。子どもの自主性は、自己意識・自尊感情が発達してくると「第一次反抗期」の自己主張となって発揮されるようになる。分離不安の克服については、「母親のイメージを内在化し、対象の永続性を理解することで母親の不在にも耐えることができるようになる」とするアタッチメント理論の考えが一般的に支持されている(Mahler et al., 1975)。

ところで、アメリカのテレビドラマや映画を見ていると、乳幼児が子ども部屋に一人で寝ている場面を目にすることがある。住宅事情の違いもあるとはいえ、日本では親子で川の字になって寝るといのが就寝時の典型的な姿なので、そうした光景には違和感を覚えることがあるだろう。しかしながら、子どもと一緒に寝るといふ就寝スタイルは日本特有のものではなく、集団主義的な民族には広く見られるようである。Fengら(2001)によれば、生後1年間の一人寝の時間は集団主義的民族(プエルトリコ人)よりも個人主義的民族(アングロサクソン系米国人)の方が長い。となれば、一人寝をする子どもの方が自立心を強くもつと考えられそうだが、むしろ一人寝をしない子どもほど自立心が強いという調査結果も報告されている(Keller, & Goldberg, 2004)。アタッチメント理論を適用するならば、母親と一緒に寝ることで愛着感情が十分に満たされ、その安心感が結果的に自立心を向上させるということであろう。いずれにせよ幼児期の一人寝と子どもの精神的自立に何らかの関わりがあるのは間違いない。

幼児期のしつけ

子どもの心の発達には遺伝的要因と環境要因の相互作用の上に成り立っているという考え方が広く受け入れられている。そして、幼児期の自立において環境要因の最たるものは親のしつけであろう。親のしつけを調査する手法を大別すると、子どもへの関わりを直接あるいは間接的(ビデオ撮影)に観察する方法、インタビューや質問紙による親の自己報告、

子どもの頃受けたしつけを回想する方法の3つがある。これまでに、これらの手法を用いて、親のしつけを規定する様々な要因が明らかにされてきた。親のパーソナリティはその内の一つと考えられるが(例えば、Kochanska et al., 1997; Metsäpelto & Pulkkinen, 2003)、本論ではパーソナリティ以外の要因、特に我々の研究に関連した諸要因を中心に見ていくことにする。すなわち、子ども要因、親のしつけの遺伝的要因と環境要因である。

まず子ども側の要因としては、子どもの出生順位、性別によってしつけ方が変わることは容易に推察できるだろう。親の自己報告に基づく調査では、幼児期であっても年長児をより厳しくしつけることが確かめられている(Volling, 1997)。しつけを受ける子どもの方でもそうした違いを肌で感じ取っていて、子どもの頃に受けたしつけを回想するEMBU尺度(Perris et al., 1980)を用いた調査によれば、長男は父親からの「拒絶」を強く意識し、女性は両親の「情緒的暖かさ」を感じている(Someya et al., 2000)。このように、親の性別と子どもの出生順位・性別で交互作用効果が生じるのは至極当然なことで(例えば、Winsler et al., 2005)、むしろ意識的に役割を区別している家庭もあるだろう。ただし、これに反して、両親の養育態度が一致することがしつけには重要だとする見方もある(Lindsey & Mize, 2001)。

続いて親の側の要因に着目すると、親のしつけにもまた遺伝的要因と環境要因の両方が関与している。人間は他の動物に見られるような子育ての本能を失っているため、しつけに遺伝的要因を見出すことは難しいように思えるだろう。しかしながら、しつけのスタイルが遺伝的に受け継がれていることが、双生児法を用いた研究によって確認されている(Losoya et al., 1997; Spinath & O'Connor, 2003)。これらの研究では、子どもをもつ一卵性双生児と二卵性双生児を調査対象とし、自分が行っている子どものしつけについて自己評定が求められた。自分のしつけが育った環境にのみ依存するならば、一卵性双生児と二卵性双生児の間に違いは生じないはずである。しかし、双子のペア同士で回答の相関を分析すると、二卵性ペアより一卵性ペアの相関が高くなった。全く同じ遺伝形質を共有する一卵性双生児の方がしつけの類似性が高いということは、しつけのスタイルに遺伝的な影響があることを意味している。

次に、しつけの環境要因でまず挙げられるのが、しつけの世代間の伝達、つまり“その親”のしつけの影響である。虐待された経験をもつ親は自らも虐待する親になるのかという問題はこれまでしばしば論じられてきた(Kaufman & Zigler, 1987; Spinetta & Rigler, 1972)。虐待のような極端なケースでなくても、子どもの頃厳しくしつけられた親は自分の子どもに対して厳しい態度で接するのである(Hops et al., 2003)。EMBU尺度を用いた調査でも、自分が親から受けたしつけと親が祖父母から受けたしつけの間に類似性があることが認められ、しつけの世代間伝達の実証されている(Lundberg, 2000)。

よりマクロな環境要因では、集団主義文化・個人主義文化の影響が親のしつけに表れる

ことがよく知られている。Harwoodら(1999)は1歳前後の子どもとその母親のやりとりを観察し、個人主義民族(アングロサクソン系米国人)のしつけ方は子どもの行動を促す示唆と子どもへの賞賛が特徴であるのに対し、集団主義民族(プエルトリコ人)のしつけには指示的・統制的な性格があることを見出した。日韓と欧米を比較した国際調査でも、日韓の親は「生まれ」より「育ち」を重視し、「小さいときにしっかりしつける」意識を持つことが明らかにされている(村山, 1988)。ただし、民族・文化の違いを環境要因とみなすべきなのかは依然検討する余地が残されており、そもそも民族集団には遺伝的性格特性があるという調査結果も最近報告されている(Yamagata et al., 2006)。

目的と方法

集団主義、農耕民族、恥の文化、村社会など、日本を特徴づける文化的背景は他のどの国よりも増して共同体や社会を意識する性質をもつ。これまでの研究が明らかにしているように、そうした性質は親のしつけにも表れる。欧米のしつけが一人の人間として精神的に自立することを重視するのに対し、日本の親は周りの親や子どもを意識しながら、精神的自立よりもまず“他の子と同じように”身辺自立を促すのかもしれない。そこで本研究では、身辺自立と精神的自立についての親の意識としつけについての親の意識との関係を明らかにするため、幼稚園・保育園に子どもを通わせる保護者を対象に質問紙調査を行うことにした。

さらに調査ではしつけの世代間伝達についても検討した。核家族化の進む日本社会においてもやはり子育ての最大の情報源は親である(ベネッセ教育研究開発センター, 2004)。奈良県で行なわれたアンケート調査では、「親からよく言われた言葉」と「子どもによく言う言葉」は、「基本的なしつけに関する内容」が共に突出して高い割合となった(奈良県教育委員会, 2001)。したがって我々の調査でも、自立への意識にしつけの世代間伝達の影響が見られるかもしれない。

調査対象

新潟県のA保育園に3歳から6歳の子どもを通わせている保護者39名とA幼稚園に子どもを通わせている保護者119名。回答者の性別は男性12名、女性140名、不明6名だった。回答者(不明8名を除く)の平均年齢は34.6歳(標準偏差4.5)で、年齢の範囲は23-47歳だった。回答の際に対象とされた子どもの人数は、3歳が16名、4歳が37名、5歳が63名、6歳が41名、不明が1名だった。

調査方法と調査時期

A保育園、A幼稚園の園長に調査を依頼し、調査用紙を保護者に配布、回収してもらっ

た。調査は2005年11月に実施した。

調査内容

調査用紙は回答者の負担とならないよう必要最低限の項目を吟味して作成した。調査内容は以下の項目から構成されている。

(1) 保護者の属性としつけの意識

回答する保護者の性別、年齢を尋ねた。続いて、「自分は過保護に育てられたと思う」「子どもに対して厳しい方だと思う」「親から受けたしつけと自分のしつけは似ている」の3項目を問い、「全くあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「よくあてはまる」の5段階で評定を求めた。

(2) 子どもの属性

子どもの性別、年齢、きょうだい数と出生順位を尋ねた。きょうだいで通園している場合には、年上の子どもについて回答してもらった。以下の項目についても同様である。

(3) 身辺自立に関して

自立している内容：「おしっこ」「うんち」「ボタンのある服」「ボタンのない服」「くつ」「くつ下」「歯磨き」「洗顔」「入浴後体をふく」の9項目の中から、子どもが親の手を借りずに一人でしている生活習慣を全て選択するよう求めた。

自立についての意識：「なるべく早く自立させたい」「子どものペースに任せたい」「つい手をかけてしまう」「他の子どもに比べると自立しているほうだ」の4項目を設定し、

(1) で用いた5段階評定で回答を求めた。

家庭での方針：身辺自立についての考え方や家庭でのしつけを自由記述で回答してもらった。

(4) 精神的自立に関して

自立している内容：「一人で寝る」「人見知りしない」「留守番できる」「着る服を選ぶ」「何でも自分でしたがる」「お泊りできる」「親と遊ぶより友だちと遊びたがる」の7項目の中から、あてはまるものを全て選択するよう求めた。

自立についての意識：「なるべく早く自立させたい」「子どものペースに任せたい」「まだ甘えるのは仕方がない」「他の子どもに比べると自立しているほうだ」の4項目を設定し、(1) で用いた5段階評定で回答を求めた。

家庭での方針：精神的自立についての考え方や家庭でのしつけを自由記述で回答してもらった。

結果

最初に、各項目における回答の分布を記す。しつけについての意識(図1)は、3項目とも「どちらともいえない」という回答がもっとも多かったが、「過保護に育てられた」は「あまりあてはまらない」保護者が比較的多く、「子どもに厳しい」は「ややあてはまる」とする保護者が比較的多かった。これら2項目に比べると「親のしつけと似ている」は偏りが小さかった。

自立していると判断された生活習慣(図2)は、身辺自立は「くつ」「おしっこ」「ボタンのない服」「くつ下」「ボタンのある服」「うんち」「歯磨き」「洗顔」「入浴後体をふく」の順で多

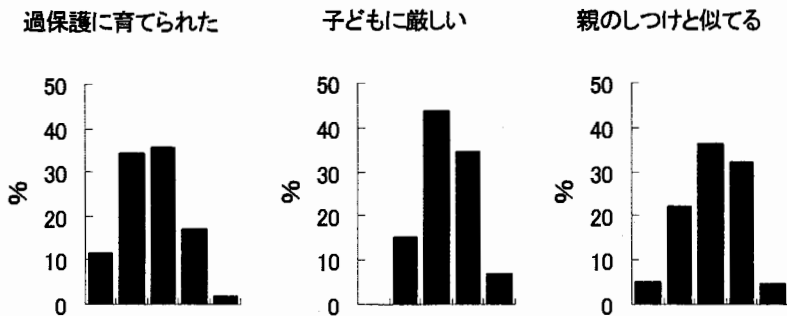


図1 しつけについての親の意識

3つのグラフともに、横軸が示すのは左から「全くあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「よくあてはまる」の尺度水準である。

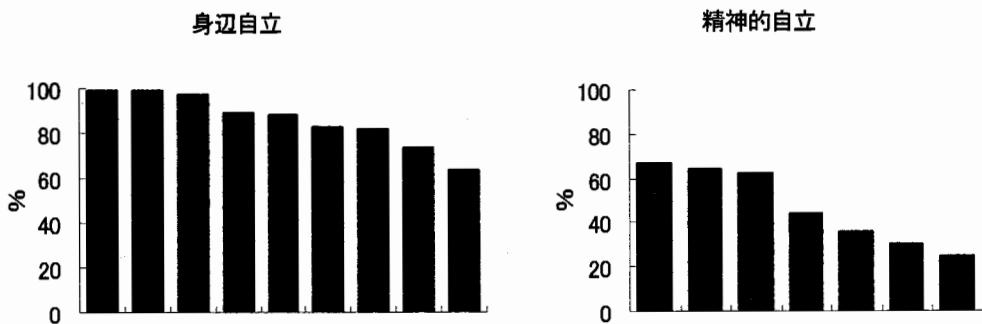


図2 自立していると判断された生活習慣

身辺自立は左から「くつ」「おしっこ」「ボタンのない服」「くつ下」「ボタンのある服」「うんち」「歯磨き」「洗顔」「入浴後体をふく」。

精神的自立は左から「着る服を選ぶ」「自分でしたがる」「親より友達と遊ぶ」「人見知りしない」「お泊りできる」「留守番できる」「一人で寝る」。

く、精神的自立は「着る服を選ぶ」「自分でしたがる」「親より友達と遊ぶ」「人見知りしない」「お泊りできる」「留守番できる」「一人で寝る」の順で多かった。身辺自立は平均86.0%が自立しているのに対し、精神的自立は平均46.9%の自立に止まった。

自立についての意識 (図3) を見てみると、「なるべく早く自立させたい」は身辺自立を「ややあてはまる」とする保護者が比較的多いのに対し、精神的自立は半数以上が「どちらともいえない」と回答している。「子どものペースに任せたい」は身辺自立、精神的自立ともに半数が「ややあてはまる」と回答し、次いで「よくあてはまる」という回答が多い。身辺自立の「つい手をかけてしまう」は「ややあてはまる」とする回答が若干多いものの、「あまりあてはまらない」とする回答も見られ、偏りは比較的小さい。一方、精神的自立の「まだ甘えるのは仕方がない」は半数が「ややあてはまる」と回答するなど、

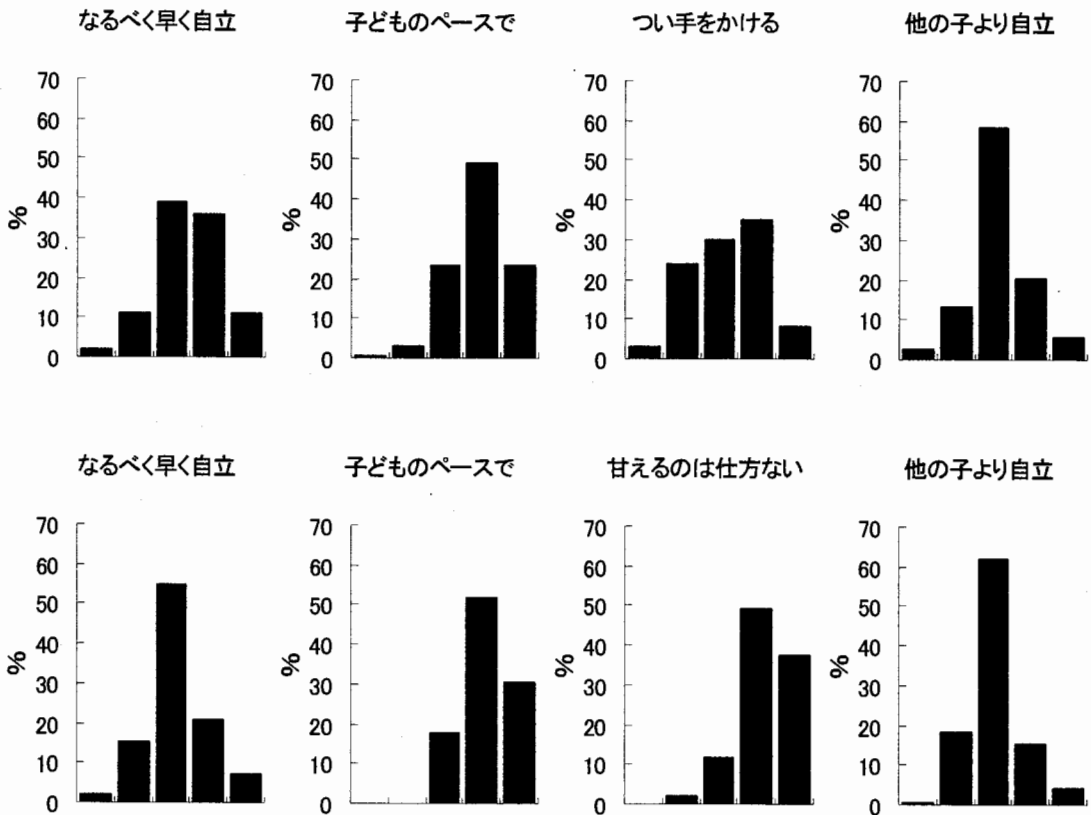


図3 自立についての意識

上段が身辺自立で下段が精神的自立の結果を示す。

いずれのグラフも、横軸が示すのは左から「全くあてはまらない」「あてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「よくあてはまる」の尺度水準である。

あてはまる方に偏っている。「他の子どもに比べると自立している」は身辺自立、精神的自立ともに半数以上が「どちらともいえない」と回答している。

次に統計的検定では、「全くあてはまらない」～「よくあてはまる」の評定を1～5点の評定値として得点化した。また、身辺自立、精神的自立のそれぞれにおいて、子どもが自立していると判断された生活習慣の総数を“自立得点”として分析に利用した。

相関分析

回答した保護者の年齢、しつけについての意識3項目、身辺自立についての意識4項目と自立得点、精神的自立についての意識4項目と自立得点の計14項目間で積率相関行列を求めた。保護者の年齢はいずれの項目とも有意な相関が得られなかったため、これを除いた相関行列を表1に示す。相関係数のうち太字で示したものは有意な相関 ($p < .05$) が得られた項目対である。

しつけの意識と自立の意識の関係

まず親のしつけの意識が自立についての考え方や態度にどう反映されているのか見ていくことにする。自分が過保護に育てられたと思っている親ほど、身辺自立、精神的自立ともに、自分の子どもが他の子どもより自立しておらず、自立は子どものペースに任せられないと考えているが、その一方で身辺自立についてはつい手をかけてしまっている。しかし以上のような関係がありながら、過保護に育てられた親ほど、自分のしつけが親のしつけに似ていると思っているわけでもなければ、厳しくないと思っているわけでもなかった。

自分は子どもに厳しいと思っている親ほど、自分のしつけが親のしつけに似ていると思っている。また、子どもに厳しい親ほど、身辺自立については自分の子どもが他の子より自立していると考えていて、実際自立得点も高いが、精神的自立ではそのような関係は見出されない。

ただしこれらの結果については、相関係数の絶対値がいずれも0.2前後なので、かなり弱い相関関係でしかない。

身辺自立について

子どものペースに任せようと考えている親ほど、早く自立させたいとは思っておらず、自分の子どもが他の子より自立していると考えている。つい手をかけてしまう親ほど、自分の子どもは他の子より自立していないと考えていて、自立得点も実際低い。

精神的自立について

子どものペースに任せようと考えている親ほど、自分の子どもは他の子より自立してい

表1 しつけについての意識と自立についての意識の相関行列
有意水準5%で有意だった相関係数は太字で示されている。

	しつけ		身辺自立		精神的自立		
	過保護 厳しい	似ている 似ている	自立得点 早く自立	ペース ついて手を	自立得点 早く自立	ペース 仕方がない	他の子
しつけ							
過保護に育てられた	-.026	.083	-.086	-.179	.264	-.193	-.149
子どもに厳しい方だ		.165	.212	.041	-.154	.063	.094
親のしつけと似ている			.164	.009	-.059	.013	.056
自立得点			-.040	.067	-.255	.059	.011
早く自立させたい				-.273	-.003	.608	-.057
子どものペースで				-.128		-.075	.481
つい手をかけてしまう						.027	.009
他の子より自立している						.203	-.248
精神的自立						.266	.223
自立得点						-.043	.071
早く自立させたい							-.124
子どものペースで							-.163
甘えるのは仕方がない							.538
他の子より自立している							.110

表2 身辺自立と精神的自立の評定値の比較

	身辺自立		精神的自立	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
早く自立させたい	3.43	0.90	3.16	0.84
子どものペースで	3.92	0.81	4.13	0.69
甘やかしてしまう	3.20	1.00	4.22	0.72
他の子より自立	3.13	0.81	3.03	0.72

表3 出生順位の影響

	1人っ子		長子		次子	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
身辺自立						
つい手をかける	3.58	1.00	3.34	0.88	2.89	1.03
他の子より自立	2.86	0.87	3.09	0.75	3.33	0.80
自立得点	6.97	2.14	7.95	1.44	7.97	1.25
精神的自立						
他の子より自立	2.83	0.66	3.00	0.69	3.19	0.75

ると考えている。甘えるのは仕方がないと考えている親ほど、早く自立させたいとは思っておらず、子どものペースに任せようと考えている。

身辺自立と精神的自立の関係

身辺自立への意識と精神的自立への意識との間にはいかなる関係があるのだろうか。ここでは身辺自立と精神的自立で同じ項目同士の相関に注目しよう。身辺自立を早く自立させたいと思っている親ほど、精神的自立も早く自立させたがっている。身辺自立は子どものペースに任せようとする親ほど、精神的自立も子どものペースでいいと考えている。そ

して身辺自立が他の子より自立しているとみなされた子どもほど、精神的自立も他の子より自立しているとみなされた。

次に、身辺自立と精神的自立の評定値の平均を比較する(表2)。その際、身辺自立の「つい手をかけてしまう」項目と精神的自立の「甘えるのは仕方がない」項目はどちらも親の甘やかしを意味するものと見なし、「甘やかしてしまう」項目としてこの二つを比較した。各項目対の評定値について t 検定を行った結果、身辺自立は精神的自立より早く自立させたいという考えが強く ($t(156)=4.35, p<.001$)、精神的自立は身辺自立よりも子どものペースに任せる傾向にあり ($t(156)=3.43, p<.001$)、甘やかしてしまう ($t(156)=10.83, p<.001$) ということが示された。つまり、二つの自立の意識は相関関係にありながらも、意識の程度には差が生じているということである。

子どもの性別

自立への意識における子どもの性別の影響は、精神的自立の「他の子より自立」項目に見られたが ($t(154)=2.37, p<.05$)、身辺自立のそれは有意傾向にとどまった ($t(155)=1.90, p=.059$)。すなわち、女兒の親の方が他の子より精神的自立が進んでいるのだが、自立得点に差があったのは身辺自立で、男児より女兒の方が高かった ($t(154)=2.00, p<.05$)。

親の意識について検討するという本論の趣旨から外れるが、個々の生活習慣における自立の進み具合を男児女児で比べてみると、「人見知り」と「留守番」は男児の方がより多く自立し ($\chi^2(1)=7.09, p<.05$; $\chi^2(1)=6.56, p<.05$)、「服選び」「1人でしたがる」は女兒の方がより多く自立している ($\chi^2(1)=11.12, p<.005$; $\chi^2(1)=7.62, p<.01$) という結果になった。この結果は、男児は「分離不安の克服」から自立が進み、女兒は「自主性・自律性の発達」から自立が進むことを示している。

出生順位

出生順位の影響については、一人っ子(36人)、長子(56人)、次子もしくはそれ以降(64人)の3群に分けて分析を行った。分散分析の結果、平均値に有意な差があった項目のみを表3に示す。身辺自立については、一人っ子と長子は次子よりも「つい手をかけて」しまい(一人っ子×次子 $t(153)=3.43, p<.001$; 長子×次子 $t(153)=2.53, p<.05$)、また一人っ子に比べると次子は「他の子より自立している」と考えている ($t(153)=2.82, p<.01$)。自立得点は一人っ子が他の2群に比べて低かった(一人っ子×長子 $t(153)=2.92, p<.01$; 一人っ子×次子 $t(153)=3.06, p<.01$)。

精神的自立については、一人っ子に比べると次子は「他の子より自立している」と考えている(一人っ子×次子 $t(152)=2.40, p<.05$)。しかし自立得点に有意な差はなかった

($F(2, 153) = 1.35, p > .1$)。

以上のような結果が得られたのは、一人っ子に年少児が多く、次子に年長児が多いというように、出生順位ではなく年齢が影響していたからではない。3群の間に年齢層のばらつきはなく ($\chi^2(6) = 3.11, p > .1$)、そもそも年齢別による評定値の分析では、自立得点を除くいずれの項目においても有意な差が認められなかった ($F_s < 2.53, p_s > .05$)。

家庭での方針

自由記述形式で回答された「家庭での方針」をKJ法によるグループ分けで整理した。身辺自立についての回答は「規律」「ほめる」「手を出さない」「その他」にまとめられ(表4)、精神的自立についての回答は「情緒的サポート」「体験提供」「自然に」「意思尊重」「急がない」「その他」にまとめられた(表5)。その内容は、これまでの分析結果と同様、身辺自立には積極的で精神的自立にはやや消極的な態度が見受けられる。

総合的考察

本研究では、しつけに関する親の意識、しつけの世代間伝達の観点から、幼児期に目標とされる身辺自立と精神的自立について調査を行った。その結果、しつけと自立についての意識が身辺自立と精神的自立で異なること、性別や出生順位によって自立へ向けた意識が変わることなどが確認できた。

「親のしつけに似ている」という意識は、自分が「子どもに厳しい」という意識と弱い相関が見られるものの、その他自立についての意識とは関係が見出されなかった。しかし、親から「過保護に育てられた」と思っている親ほど、「子どものペース」に任せられず、「他の子より自立していない」と考えていたり、身辺自立に「つい手をかけてしまう」ところを見ると、自分のしつけと親のしつけが似ているという自覚はなくとも、親のしつけ方は子どもに受け継がれているようである。とはいえ、母親のしつけの様子を直接観察した研究では、母親が幼児期に受けたしつけと現在の子どもへのしつけに関連性が見られないことも示されている(Onyskiw et al., 1997)。また本研究においても「過保護に育てられた」かどうかということが実際の自立得点に反映することはなかった。しつけの世代間伝達に見られる意識と行動の乖離については今後の研究が待たれるところである。

身辺自立と精神的自立の比較をしてみると、「早く自立させたい」「子どものペースに任せたい」の項目で二つの自立の意識の間に高い相関が見られ、自立へ向けた一貫した意識を持っているようであるが、その意識の強さには程度の差があった。集団主義民族の文化的特徴から予想したように、表2や表4、5が示す結果には、身辺自立を急ぐ一方で精神的自立に消極的な親の態度が表れている。また「子どもへの厳しさ」が自立得点に反映したのも身辺自立だけであった。ただし、社会・共同体の中で他の家庭や子どもをどの程度

表4 身辺自立に対する家庭での方針

規律	<ul style="list-style-type: none"> ・自分でできることは自分でやらせる ・家の手伝いをさせるようにしている ・一つの事についてだけ毎日練習させる ・本人にいつ何をするか決めさせる
ほめる	<ul style="list-style-type: none"> ・進んでやってくれるようにおだてたりほめたりなどを心かけている ・できた事はオーバーなくらいほめ、できない事は「できなくて当たり前…もっとたくさん練習しようね」と言い、手伝うよう心がける ・甘えてやろうとしないときは声をかけ、うまくできたら多くほめる
手を出さない	<ul style="list-style-type: none"> ・助けを求めてくるまで見守る ・なるべく自分でさせて、無理そうなら手伝う ・やりたいと言った事はとりあえずやらせる ・「やって」と言っても忙しいふりをしてみたり、「やってごらん」と言いなるべく子どもの手でさせるようにしている
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・上の子と競争をさせて、自分で出来るように促す ・年上の兄弟と一緒にやる事で、真似しながらできるようになる事が多いと思っている ・仕事が忙しく、ゆっくり自立に向けたしつけをすることができない ・小学生になる前には生活習慣の自立をさせたい

表5 精神的自立に対する家庭での方針

情緒的サポート	<ul style="list-style-type: none"> ・見守りつつ、ほめる、認める事が大切 ・気持ちによりそう ・甘えたい時は甘えられる環境を作るよう心がけている
体験提供	<ul style="list-style-type: none"> ・友達との交流をたくさんさせるようにしている ・いろんな所に連れて行き、たくさんの体験が出来るような環境を作る ・お使い・お手伝いをさせる ・弟妹の面倒を見る
自然に	<ul style="list-style-type: none"> ・十分に甘えれば自然に自立できる時がくる ・自然な成り行きの中で様子を見ている ・できる事から始めたい(一人で寝る他)
意思尊重	<ul style="list-style-type: none"> ・本人の意思を聞いて、どうするか話し合う ・自分でしたがる事はなるべくさせるようにする ・子どもの意見をちゃんと聞いてあげる事が必要だと思う
急がない	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校に入ってからでもおそくない ・精神的自立について急いでしまうと、後々影響が出てきそう ・一人っ子だから、幼い面があるのは仕方がない事
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・下の子に手がかり、気づかないうちに淋しい思いをさせているので、もう少し甘えさせたい ・親は甘えて欲しいが、子どもは早くお兄ちゃんになりたい ・大人との信頼関係が自信になり、精神的自立につながると思う ・どうしたらいいかわからない

意識しているのかについては、本研究の質問紙の性質上明確な解釈ができないという課題を一部残している。「他の子に比べ自立している」項目に対して「どちらともいえない」とする回答が半数以上だったが、「どちらともいえない」の意味する内容が“他の子どもと同じくらい”なのか“よくわからない”のか判然としないのである。仮に“他の子どもと同じくらい”だとしても、そうなるように意識してしつけをしたのか結果的にそうなったのか区別することは難しい。それでも、自立得点と「他の子に比べ自立している」項目に有意な相関がある点を考慮すると、「どちらともいえない」以外の回答をした親は他の子どもと比べながら客観的な評価をしていると言えよう。

性別と出生順位の結果については、ベネッセ教育研究開発センター（2004）の調査結果と比較しながら検討しよう。ベネッセの調査では、基本的な生活習慣の自立は女兒の方が進み、自立への満足度も女兒の親の方が高いことが示されている。本研究でも身辺自立の自立得点は女兒の方が高く、彼らの結果を支持するものとなった。しかしながら自立への意識は、精神的自立において女兒の方が「他の子より自立している」他は性差が認められなかった。つまり、女兒だからといって特別な意識を持っているわけではなく、知らず知らずのうちに親のしつけ方に差が生じているか、あるいは男児女兒の発達の特徴として性差が表れたのかもしれない。次に、出生順位に関するベネッセの調査結果は、第一子の自立に対する満足度が低く、自立への要求が強いということを示している。本研究でも同様の結果が得られ、第一子の中でも特に一人っ子の親は自立の遅れを意識していることがわかった。またベネッセの調査によれば、しつけの満足度には地域差があり、首都圏の親より地方の親の方がしつけの満足度が低い。ベネッセの調査と我々の調査では質問内容や回答形式が異なるため厳密な比較とはならないが、首都圏のデータを中心とする彼らの結果と我々の結果を比べると、若干ながら新潟の子どもの方が自立は進んでいるようである。イタリアとアメリカにおける調査でも、生活習慣の自立は都市部より地方の子どもの方が進んでいることが確かめられており（Bornstein et al., 2005）、都心に比べて地方の親の意識が高いことが自立の進み具合の差に結び付いているのかもしれない。

結語

本研究の結果から、しつけについての意識、しつけの世代間伝達、自立についての意識の関連性が明らかとなった。その一方で本研究は、親の意識だけを扱うという調査の限界から、今後において調べられるべき課題を残している。例えば、祖父母が自分のしつけ方、子どもの孫へのしつけ方をどのようにとらえているのか、また、しつけの意識と行動の関係を踏まえた上で子どもの自立との相互作用を検討しなければならない。今回の調査を足がかりに、より大規模で綿密な調査を行いたい。

謝辞

この論文は新潟中央短期大学平成17年度卒業論文において発表された五十嵐直美氏（現白ゆり幼稚園教諭）との共同研究をもとに作成された。本研究を行うにあたり同氏とは意義深い議論を重ねてきた。同氏の本研究への貢献に対し、ここに記して深謝する。

また、アンケート調査の協力を快く応じていただいたA保育園ならびにA幼稚園と、アンケート調査に回答いただいた両園の保護者の方々にも謝辞を記す。

引用文献

- ベネッセ教育研究開発センター(2004)第2回子育て生活基本調査幼児版
<http://benesse.jp/berd/data/index.shtml>
- Blum, N. J., Taubman, B., & Nemeth, N. (2004) Why is toilet training occurring at older ages? A study of factors associated with later training. *Journal of Pediatrics*, 145, 107–111.
- Bornstein, M. H., Giusti, Z., Leach, D. B., & Venuti, P. (2005) Maternal reports of adaptive behaviours in young children: Urban–rural and gender comparisons in Italy and United States. *Infant and Child Development*, 14, 403–424.
- Feng, X., Harwood, R. L., Leyendecker, B., & Miller, A. M. (2001) Changes across the first year of life in infants' daily activities and social contacts among middle–class Anglo and Puerto Rican families. *Infant Behavior & Development*, 24, 317–339.
- 藤崎真知代(2005) 発達段階に応じたしつけ—いつ、何をしつけるか *児童心理*, 829, 16–21.
- 深谷和子(2000) 自立とは何か—身辺自立、経済的自立、精神的自立、そして「社会的自立」 *児童心理*, 726, 11–16.
- Harwood, R. L., Schoelmerich, A., Schulze, P. A., & Gonzalez, Z. (1999) Cultural differences in maternal beliefs and behaviors: a study of middle–class Anglo and Puerto Rican mother–infant pairs in four everyday situations. *Child Development*, 70, 1005–1016.
- Havighurst, R. J. (1953) *Human development and education*. Oxford, England: Longmans, Green. (荘司雅子監訳(1995) *人間の発達課題と教育* 玉川大学出版)
- Hops, H., Davis, B., Leve, C., & Sheeber, L. (2003) Cross–generational transmission of aggressive parent behavior: a prospective, mediational examination. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 31, 161–169.
- Horn, I. B., Brenner, R., Rao, M., & Cheng, T. L. (2006) Beliefs about the appropriate age for initiating toilet training: are there racial and socioeconomic differences? *Journal of Pediatrics*, 149, 165–168.
- Keller, M. A. & Goldberg, W. A. (2004) Co–sleeping: help or hindrance for young children's independence? *Infant and Child Development*, 13, 369–388.
- Kaufman, J. & Zigler, E. (1987) Do abused children become abusive parents? *American Journal of Orthopsychiatry*, 57, 186–192.
- Kochanska, G., Clark, L. A., & Goldman, M. S. (1997) Implications of mothers' personality for their parenting and their young children's developmental outcomes. *Journal of Personality*, 65, 387–420.
- Lindsey, E. W. & Mize, J. (2001) Interparental agreement, parent–child responsiveness, and children's peer

- competence. *Family Relations*, 50, 348–354.
- Losoya, S. H., Callor, S., Rowe, D. C., & Goldsmith, H. H. (1997) Origins of familial similarity in parenting : a study of twins and adoptive siblings. *Developmental Psychology*, 33, 1012–1023.
- Lundberg, M., Perris, C., Schlette, P., & Adolfsson, R. (2000) Intergenerational transmission of perceived parenting. *Personality and Individual Differences*, 28, 865–877.
- Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. (1975) *The psychological birth of the human infant : symbiosis and individuation*. New York : Basic Books. (高橋雅士・浜畑紀・織田正美訳 (1981) *乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化* 黎明書房)
- Metsäpelto, R. L. & Pulkkinen, L. (2003) Personality traits and parenting : Neuroticism, extraversion, and openness to experience as discriminative factors. *European Journal of Personality*, 17, 59–78.
- 村山貞雄編 (1988) *幼児の養の国際比較に関する基礎調査* 多賀出版
- 奈良県教育委員会 (2001) *家庭教育アンケート調査報告書*
http://www.nara-c.ed.jp/katei/suishin/16_kateiho-mu_2.htm
- Onyskiw, J. E., Harrison, M. J., & Magill-Evans, J. E. (1997) Past childhood experiences and current parent–infant interactions. *Western Journal of Nursing Research*, 19, 501–518.
- Perris, C., Jacobsson, L., Lindström, H., von Knorring, L., & Perris, H. (1980) Development of a new inventory for assessing memories of parental rearing behaviour. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 61, 265–274.
- Someya, T., Uehara, T., Kadowaki, M., Tang, S. W., & Takahashi, S. (2000) Effects of gender difference and birth order on perceived parenting styles, measured by the EMBU scale, in Japanese two–sibling subjects. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 54, 77–81.
- Spinath, F. M. & O'Connor, T. G. (2003) A behavioral genetic study of the overlap between personality and parenting. *Journal of Personality*, 71, 785–808.
- Spinetta, J. J. & Rigler, D. (1972) The child–abusing parent : A psychological review. *Psychological Bulletin*, 77, 296–304.
- Volling, B. L. (1997) The Family correlates of maternal and paternal perceptions of differential treatment in early childhood. *Family Relations*, 46, 227–236.
- Winsler, A., Madigan, A. L., & Aquilino, S. A. (2005) Correspondence between maternal and paternal parenting styles in early childhood. *Early Childhood Research Quarterly*, 20, 1–12.
- Yamagata, S., Suzuki, A., Ando, J., Ono, Y., Kijima, N., Yoshimura, K., Ostendorf, F., Angleitner, A., Riemann, R., Spinath, F. M., Livesley, W. J., & Jang, K. L. (2006) Is the genetic structure of human personality universal? A cross–cultural twin study from North America, Europe, and Asia. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90, 987–998.